革命前メキシコの木綿工業における移民企業者の役割

—— オリサバ地方のケース・スタディ ——

山田睦男（やまだ むつお）

〈目　　次〉

I 序　　章
1. メキシコの経済発展における移民企業者の役割
2. メキシコ木綿工業の発展
II オリサバ地方の木綿工業における移民企業者の役割
1. ココロアパン工場のケース・スタディ(1836〜1899年)
2. オリサバ工業株式会社(CIDOSA)のケース・スタディ(1889〜1911年)
III 結　　論

I 序　　章

1. メキシコの経済発展における移民企業者の役割

1821年の独立以後，とくに，19世紀末から今世紀初頭までのディアス (Díaz) 独裁政権時代(1876〜1911年)のメキシコでは，外国資本の導入と第1次産品の輸出という二つの対外的要因が，経済発展の主導力となった。輸出部門の「挿入経済」(enclave economy) と，それに関連した鉄道，電気，電信，電話，ガスなどのインフラストラクチャーの形成は，確かに，全体としては，メキシコの植民地的経済構造を強化したが，自主的な経済政策，地理的，社会的条件による市場規模と質，資源などの諸要因に恵まれた少数の部門では，初期的工業化の基盤となった。メキシコ革命は，このような経済変動の帰結である。

このような経済機会の出現を活用した初期の企業者たちの大多数は，移民であった。ストラースマンは，メキシコのみならず，ラテン・アメリカ全体について，「第1次世界大戦前には，一般に，移民が近代的製造工業設立の先駆者となった」と述べ，メキシコにおける成功した移民企業の典型として，フランス系のオリサバ工業株式会社 (Compañía Industrial de Orizaba, S. A., CIDOSA) をあげている(注1)。

ブランデンバーグは，1910年，すなわち，革命直前のメキシコにおける主要な製造工業企業をあげているが，企業者の氏名，起源の明らかな6企業ないし企業群のうち，4企業まで，移民ないし外国人が関係していることは，注目に値する(注2)。

また，ヴァーノンによれば，1914年のメキシコの主要工場27のうち，18は完全に外国人企業者のみに所有され，少なくとも，25にはなんらかの形で外国人が関係していた(注3)。

現在においても，メキシコを含め，ラテン・アメリカでは，「土着 (native) 企業は，かなりしばしば，移民やその子孫によって，経営されている」(注4)のである。メキシコの実業指導者に関する一研究によれば，109人の大経営者のうち，26人が父方の祖父に外国人をもち，特に傑出した32人の経営者のうち14名は，父方の祖父に外国人をもっていた(注5)。

以上に述べたような，メキシコの初期的工業化の段階における移民企業者の成功の原因の分析

は，メキシコにおける企業者精神の生成の問題解明に有益であろう。ここで，三つの仮説的想定をたてる。

(1) 移民が，移住前にもっていた文化的諸要因（価値体系，行動様式，移住の動機，目標，企業活動に関する経験，知識）が，移住後のかれの企業活動を益する。

(2) 移民は，移住という行為によって，単に，異なった社会にはいるだけでなく，しばしば，全く新しい未経験の企業活動を行なうことを余儀なくされる。そして，そこでの第1次的な，経験，知識，資本などの蓄積が，その後のかれの第2次的な企業活動の基礎となる。

(3) 移住によって，移民は，異なった社会で，新しい文化的状況(社会的格付け，社会的逸脱，目標，動機）の中におかれ，固有の文化的諸要因の再編成を経験する。こうして，企業者にとって有利な価値体系，行動様式などが生まれる。

いうまでもなく，これらの要因は排他的なものではなく，現実には相互に補強しあうことが多いであろう。

(1)は常識的には，肯定できるが，本国では，工業において顕著な企業者精神を発揮しているように思えないイタリア人やアラブ系の企業者が，ラテン・アメリカの各国では成功している事実を考慮すると，移住前の企業活動の経験は必ずしも不可欠な要因とは思えない。しかし，移住者固有の文化的諸要因のうち，教育程度や，動機などのいくつかの要因が，選択的に，有利に作用することはありえよう。

(2)に関しては，オーブリーの見解が参考になる。かれによれば，移民は，新社会において地主や官吏になるよりは，商業に従事することがより容易であり，本国との関係も利用できることを見いだすはずであり，貿易商から行商人に至る各種の活動は，資本のみならず，市場に関する情報と広い視野を与え，工業における新しい企業活動の機会に敏感にさせるという利点をもち，かれの企業活動をしばしば成功に導くのである(注6)。ただし，移住後の職業選択において，すでに文化的諸要因の影響がないとはいえないであろう。さらに，商，工業における移民企業者が，植民地的経済構造をもつ低開発国においては，貿易，投資などの面において，本国との関係を利用できるという仮説も重要である。

(3)に関して，ブラジルの著名な社会学者フレイレは，「移民の子供たちは，『過渡的なタイプ』(transitional type) の道徳的に劣る人間で，商業，実業や政治において成功するためにはなんでもする」と説明している(注7)。ロッテンバーグは，ジャマイカにおけるシリア人，レバノン人，中国人の企業者としての成功について，「周辺的人間」(marginal man) の概念を適用して，分析している(注8)。

筆者は，以上の想定を念頭において，メキシコの近代的木綿工業確立期における，ベラクルス (Veracruz) 州オリサバ (Orizaba) 地方の企業者史の歴史実証的研究を発表し，移民企業者の研究を通して，メキシコにおける企業者精神の生成研究の一助としたい。

このテーマ選択の理由として，以下があげられる。

(1) 19世紀のメキシコには，移民が少なく，経済発展に対するかれらの貢献を，企業者精神との関係で分析することがより容易である。南アメリカ南部では，移民の貢献は，「生産的人口」の急激な拡大という性格をも含んでいる。

(2) メキシコの木綿工業は，植民地時代には，

ラテン・アメリカで最も進んだ手工業の伝統をもち，独立後，近代的木綿工業が工業化の初期に重要な役割を果たした。このため，一般的な資料は，多い。

(3) オリサバ地方は，次節で述べるような各種の根拠から，19世紀末のメキシコの木綿工業を典型的に代表していた。たとえば，フランス移民商人が，首都からはいりこみ，この地方の土着的企業者を代替した。

(4) ストラースマンやブランデンバーグが認めているように，この地方の CIDOSA は，木綿工業という枠を離れて，メキシコ全体から見ても，当時の主要企業の一つに数えられる。

(5) このテーマに関し，まだ，まとまった研究が全く存在しない(注9)。

2. メキシコ木綿工業の発展

植民地時代(1519～1821年)

スペイン人による征服以前に，メキシコの原住民は，木綿の栽培・利用を知っていた。征服直後，スペインから木綿手工業が導入され，しだいに，植民地内で最も重要な産業となった。木綿業の中心地は，プエブラ (Puebla)，トラスカラ (Tlaxcala)，グァダラハラ (Guadalajara)，ケレタロ (Querétaro)，サン・ミゲル (San Miguel)，テスココ (Texcoco) などであった(注10)。

生産の形態には，オブラヘ (obraje：工房) におけるマニュファクチャーと家内手工業があった。前者は，封建的なエンコミエンダ (encomienda) 制内に発生し，強制無償労働力に依存していたが，16世紀中葉ごろから，レパルティミエント (repartimiento) 制適用の対象となり，官吏により配分される強制有償労働力に依存するようになり，1632年以後は，ペオナヘ (peonaje) 制により，おもに，債務労働者（起源的，理論的には，自由契約労働者）と罪人の労働力に依存しながらも，少数の自由労働者を使い，ギルドの制約からもある程度解放されるなど，資本主義的企業としての性格を強めていた。グリーンリーフによれば，「オブラヘは，18世紀には，本質的に中世的な経済環境にあって，台頭する資本主義を依然として代表していた」(注11)のである。

家内手工業については，ポタッシュのプエブラの製糸業の研究がある。初期には，糸繰りは，町の外の原住民によって行なわれていたが，しだいに，町の貧民の糸繰女 (hilandera) によって行なわれるようになった。彼女たちは，少額の資本を蓄積した織物職人や，さらに後期には，後者を従属させた商業資本家に雇われていた(注12)。こうして，メキシコの植民地時代末期には，オブラヘの内外で，資本主義的企業活動の萌芽が見られたのであった。

独立から共和国再建期まで(1821～1875年)

1821年の独立後も，植民地時代末期の木綿業は存続したが，独立は，スペインの重商主義的産業統制の消滅と先進国の技術導入の可能性の出現をもたらす一方，先進国の工業製品との競争の激化を意味した。木綿業において支配的だったスペイン資本は，1827年のスペイン人の全面追放の措置とともに，国外に流出し，1836年の両国の国交回復まで，公然と逆流することはなかった。ギルドは，1814年に廃止されたので，オブラヘの企業者は，相互扶助の手段を失っていた。こうして，1830年代にはいると，メキシコの伝統的木綿業は，衰退の危機に直面した。1828年には，プエブラだけで，約3万の手工業者と労働者を所有していたが(注13)，1831年の全国の木綿手工業者の総数は5000人にすぎなかった(注14)。

第 1 表　メキシコ木綿工業の発展(1837～1962年)

年	工場数	織機数	錘数	労働者数	マンタ点数	市販用製糸量(kg)	製品の価格(ペソ)
1837					44,929(a)		
1839					124,948(a)		
1841					195,758(a)		
1842					217,851(a)		
1843	57(b)	2,609(b)	125,362(b)		414,951(a)		
1844	62(e)		112,188(e)		507,565(a)	587,560(e)	
1845	72(c)				656,512(a)		
1861	65(d)						9,264,814(d)
1863	53(e)		133,122(e)	16,336(f)			
1876	47(g)		119,278(g)				
1879	70(h)						18,500,000(d)
1880	97(e)	9,214(e)	258,458(e)	12,346(e)	4,800,000(f)		
1884					3,373,608(i)	2,753,000(i)	11,723,628(i)
1895(j)	110	12,974	428,560	19,575	9,122,772	2,015,116	23,657,533
1898(k)	112	13,944	469,547		9,875,764	1,721,612	28,242,766
1899(k)	120	18,069	588,474	37,767	10,239,799	1,896,042	29,753,414
1900(k)	134	18,733	591,506	26,708	11,552,952	1,884,401	35,458,578
1901(k)	133	18,222	595,728	24,964	11,581,523	1,837,302	33,877,215
1902(k)	124	20,271	632,601	26,149	10,428,532	1,879,329	28,779,999
1903(k)	115	20,364	635,940	27,456	11,587,105	2,146,289	36,907,081
1904(k)	119	22,021	678,058	30,162	12,406,523	1,689,155	42,510,911
1905(k)	127	22,772	688,217	31,673	13,731,638	1,537,642	51,214,426
1906(k)	130	23,506	613,548	33,132	15,456,187	2,162,895	51,170,746
1907(k)	129	24,997	732,876	35,816	18,928,832	2,117,738	51,689,954
1908(k)	132	25,327	726,278	32,229	16,280,843	2,420,626	54,933,912
1909(k)	129	25,017	702,874	31,963	13,887,911	1,952,612	43,370,012
1910(k)	123	24,436	725,297	32,147	13,936,269	2,768,314	50,651,358
1911(k)	119	27,019	762,149	32,209	15,090,669	2,766,973	51,348,091
1917(l)		20,489	573,072				
1923(l)		27,770	752,225				
1930(l)		29,229	800,023				
1938(l)		36,577	910,174				
1950(l)		37,167	1,109,048	48,489			
1962(m)		38,604	1,192,000	42,000			

(注)　統計は，操業中の工場のみを対象としている。マンタとは，大衆の衣服に使われる未漂白のキャリコで，1点は一定の長さをもつ。

(出所)　(a) Jan Bazant, "Estudio sobre la productividad de la Industria Algodonera Mexicana en 1843-45," *La industria nacional y el Comercio Exterior (1842-1851)* (México, D. F., 1962), pp. 37, 38.

(b) Ernesto Lobato López, " La industria textil de algodón de México," *Investigación económica*, XIX (2) (1959), 365.

(c) Agustín Cue Cánovas, *Historia social y económica de México* (México, D. F., 1963), pp. 200, 259.

(d) José Bravo Ugarte, *Historia de México* (2 vols., México, D. F., 1944-59), Tomo II, p. 313.

(e) Luis Chávez Orozco, *Revolución industrial, revolución política* (México, D. F., 1937), p. 61.

(f) Roland Napoleon Bonaparte, *et al.*, *Le Mexique au début du XX^{e} siècle* (2vols., Paris, 1904), T. 1, p. 358.

(g) Bravo Ugarte, *op. cit.*, Tomo II, p. 442.

(h) Hubert H. Bancroft, *Vida de Porfirio Díaz* (San Francisco, 1887). p. 603.

(i) Antonio García Cubas, *Cuadro geográfico, estadístico…de los Estados Unidos Mexicanos* (México, D. F., 1884), p. 31.

(j) Mexico, *Anuario estadístico (1895)* (México, D. F., 1896), 付表。

(k) *México industrial*, VII (4) (abril 1928), n. p.

(l) Javier Barajas Manzano, *Aspectos de la industria textil de algodón de México* (México, D. F., 1959), pp. 26, 35, 43.

(m) 筆者のインタビュー：Lic. Octavio Gómez Grajales (CIDOSA前顧問弁護士) (1965年4月オリサバ市)。

1821年に，早くも，外国綿製品の輸入禁止の布告が出されたが，政府の弱体と，歳入源としての関税の重要性のため，実効はなかった。1830年に発足したブスタマンテ (Bustamante) 政権の内相アラマン (Lúcas Alamán) は，関税と興業銀行 (Banco de Avío) によって，木綿工業を中心とする諸産業の育成を試みた。外国綿製品には5％の従価税が課せられ，その収入の5分の1は，機械輸入，技術導入のため，民間の企業者に融資されることになった(注15)。この措置は，1842年までしか続かなかったが，その後も，綿製品に対する関税はだいたいにおいて維持され，しだいに引き上げられたことと相まって，メキシコの近代的木綿工業の基盤形成を助けた。

プエブラのアントゥニヤーノ (Estevân de Antuñano) は，興業銀行から3万ペソの融資を得て，1835年，プエブラに，メキシコ最初の近代的木綿工場 La Constancia Mexicana を開設し，翌年には，政界から引退したアラマンが自ら，オリサバに，Cocoloapan 工場を開設した。こうして，近代的木綿工業は，各地で，伝統的手工業を利用かつ侵蝕しながら，徐々に発達した (第1表)。その発達を妨げた要因は，密輸外国製品との競争，原料供給の不足と変動などであった(注16)。

ディアス独裁政権時代 (1876～1911年)

メキシコの木綿工業は，工場数から判断するかぎり，1880年代から飛躍的発展をとげ，1900年にはピークに達した (第1表)。これは，ディアス (Porfirio Dîaz) の独裁政権下の政治的安定，労働運動の抑圧と工業化に有利な経済政策と情勢・技術の変化などによるものであった。

1896年には，国内の州際関税 (alcabala) が廃止された。一方では，1910年には，1876年の30倍の規模（1万5000マイル）に達するほどの急速な鉄道建設が行なわれた(注17)。こうして，原料供給と市場拡大が容易になった。

1893年の法律は，新企業に，設立後の5年間にかぎり，連邦法人所得税，機械，資材の輸入関税免除の特権を与えた。1898年には，この法律の対象となる企業規模の下限が25万ペソから10万ペソに引き下げられた。この法律は1913年まで存続した(注18)。

外国綿製品に対する関税は，1892，1893，1896，1902年と，急速に引き下げられ，最終的には，135％にも達した。さらに，中級以下の綿製品の輸入は禁止された(注19)。関税の輸入代替促進の効果は，1882年ごろから1905年の金本位制の採用まで続いたペソ貨の交換率の緩慢な悪化により，さらに強められた。ペソ貨の裏付けとなっていた銀の価格が低下したのであるが，銀は同時にメキシコの重要輸出品目でもあったから，国際収支の面からも輸入抑制を必要ならしめたのである(注20)。

メキシコ国内の綿製品消費も増加した。1893年から1907年にかけて，それは，国民1人当たり，年率1.9％で増加し，1910／11年ごろまで，減少の気配はなかった(注21)。

木綿工業における電力の導入は，地理的制約の克服に役だち，エネルギーのコストを引き下げ，操業時間を延長した。1880年に存在していた木綿工場99のうち，水車と蒸気を併用するもの54，蒸気のみ使用するもの9，水車のみ使用するもの36で，まだ電気は導入されていなかった(注22)。電力の使用が普及したのは，1890年代である。

19世紀の最後の20年間における，メキシコ木綿工業の顕著な発展を反映して，綿製品の輸入は減少した。1888／89年から1910／11年までの期間に，輸入綿布の量は，約84％減少し，価格では，800万

ペソから，130万ペソに減少した[注23]。輸入綿製品の総輸入価格に対する比率は，1872年の58%（1884年ごろまで大差なし）から，1889／90年の22%に低下し[注24]，1892～97年には，17%，1910年には，10%にまで低下した[注25]。ただし，この段階では，輸出は，本格的に行なわれえなかった。

19世紀末には，メキシコの木綿工業の地域分布にも変化がみられた。19世紀前半には，木綿工業の中心地は，(1)プエブラ州，(2)メキシコ州，(3)ベラクルス州であった（第2表）。1位のプエブラ州の木綿製品生産の全国生産に対してしめる比率は，1843年の50%から，1845年の40%へと，急激に低下したが，技術的水準においては，同州の木綿工業は19世紀前半を通じて，最も先進的であった[注26]。

第2表　メキシコ木綿工業の地域分布（1843～45年）

州名	工場数		錘数			織機数
	1843/44(a)	1845(b)	1843(a)	1844(a)	1845(b)	1843(a)
Coahuila	2	2	—	1,960	1,960	—
Durango	5	5	5,560	5,560	5,520	140
Guanajuato	1	2	500	800	1,592	—
Jalisco	4	4	8,904	13,050	11,588	220
México	17	9	23,894	26,077	21,868	1,187
Michoacán	1	1	—	1,530	1,668	—
Puebla	21	20	37,390	38,094	42,812	530
Querétaro	2	3	5,400	4,560	4,800	112
Sonora	1	1	2,198	2,198	2,198	54
Veracruz	9	8	22,856	18,535	19,807	366
計	62	55	106,702	112,182	113,813	2,609

（注）操業中のもののみ。
（出所）(a) Miguel A. Quintana, *Estevån de Antuñano: fundador de la industria textil en Puebla* (2 vols., México, D. F., 1957), Vol. II, p. 116.
(b) *La industria nacional y el Comercio Exterior*, apendice, Núm. 4.

第3表　メキシコ木綿工業の地域分布（1876，1900年）

州名	1876年(a)				1900年(b)			
	工場数	錘数	織機数	原料綿消費(kg)	工場数	錘数	織機数	原料綿消費(kg)
Chiapas	—	—	—	—	1	1,800	62	99,635
Chihuahua	—	—	—	—	3	7,264	280	248,671
Coahuila	—	—	—	—	10	42,422	1,306	1,794,810
Colima	—	—	—	—	2	2,600	54	199,625
Durango	—	—	—	—	9	20,936	850	1,305,004
Guanajuato	—	—	—	—	8	22,460	543	1,697,349
Guerrero	—	—	—	—	1	2,598	101	134,498
Hidalgo	—	—	—	—	2	6,736	250	237,019
Jalisco	5	17,668	427	1,028,646	8	55,845	1,326	1,353,639
México（首都を含む）	5	47,700	1,264	2,090,803	22	92,382	2,740	4,908,795
Michoacán	—	—	—	—	5	14,448	393	755,303
Morelos	—	—	—	—	1	2,403	393	23,422
Nuevo León	—	—	—	—	4	17,364	557	900,634
Oaxaca	—	—	—	—	3	18,764	566	732,012
Puebla	12	39,300	926	1,716,715	24	89,162	3,109	3,939,820
Querétaro	2	22,000	680	1,380,739	4	25,910	706	1,237,734
San Luis Potosí	—	—	—	—	1	5,120	152	254,115
Sinaloa	—	—	—	—	3	5,752	209	356,265
Sonora	—	—	—	—	1	2,794	95	189,698
Tepic	—	—	—	—	3	12,176	359	943,656
Tlaxcala	—	—	—	—	9	34,013	1,056	1,922,794
Veracruz	7	20,254	560	796,219	10	105,525	3,355	5,750,708
					134	588,474	18,069	28,985,253

（注）操業中の工場と設備のみを対象としている。(—)は無視しえる数字であるためか，原資料にも載っていない。
（出所）(a) Antonio García Cubas, *The Republic of Mexico in 1876* (Tr. by George F. Henderson, Mexico, 1877), p. 29.
(b) Roland Napoleon Bonaparte *et al.*, *Le Mexique au début du XX^e siècle* (2vols., Paris, 1904), p. 359.

1876年，すなわち，ディアス期の初年には，原綿消費量による重要な木綿工業の中心地は，(1)メキシコ州，(2)プエブラ州，(3)ケレタロ州，(4)ハリスコ州，(5)ベラクルス州であった。ベラクルス州は，フランス軍侵略の被害から回復しきっていなかったと考えられる。

しかし，1900年になると，この順位は，ふたたび変わり，(1)ベラクルス州，(2)メキシコ州，(3)プエブラ州になった。この年以降しばらくの間，1工場当たりの原綿消費量は，ベラクルス州で最大であった（第3表)。

19世紀末のメキシコ木綿業には，あと一つの変化が企業者の構成に関して，見られた。1870年代までは，メキシコ人とおそらく独立前からメキシコに定着し，1836年後再移住したスペイン人が，木綿工業の企業者として，支配的であった。1843年には，これら両者からなるグループが，木綿工業の全資本の85%を所有し，イギリス，フランス，アメリカ，ドイツなどの外国人ないし移民が，残りを所有していた(注27)。そして，「1867年までに，代表的な製造工業である木綿工業は，手工業的起源から，半資本主義的 (semi-capitalist) 段階に発展し，そこでは，少数の富裕な家族が封建的なアシエンダ (hacienda)〔農園〕であるかのように，工場を経営していた」(注28)。これらの企業者の起源は，商人，高利貸商などであった(注29)。

19世紀の最後の20年間の木綿工業の飛躍的発展は，首都で繊維製品の卸・小売業に従事していたフランス移民商人の企業活動と平行していた。1900年には，フランス系企業者の所有する工場は，メキシコ国内の繊維製品販売総量の33.25%を生産していた(注30)。別の資料によれば，同年に，フランス系の4企業だけで国内の木綿製品の50%を生産していた(注31)。このような生産における独占の結果，今日に至るまで，メキシコの木綿業においては，生産から，販売に至る垂直統合的独占が形成されてきた。ディアス期の木綿工業の発展を支えたフランス系企業者の活動を，最も典型的に代表するのが，以下に紹介するオリサバ地方の木綿工業，とくにCIDOSAである。

（注1） W. Paul Strassmann, "The Industrialist," John J. Johnson, ed., *Continuity and Change in Latin America* (Stanford, 1964), p. 164.

（注2） 1910年のメキシコの主要企業と企業者

企業ないし企業群	設立年	製品	企業者	起源
Garza Sada-G. Sada	1890年代	ビール ガラス	Isaac Garza G. Sada(妻)	メキシコ人 メキシコ人
Cía Fundidora de Fierro y Acero de Monterrey	1903	鉄鋼	Prieto Isaac Garza L. Signoret	スペイン人 メキシコ人 フランス人
San Rafael	1894	製紙	De la Macorra Lenz	メキシコかスペイン人 ドイツ人
El Buen Tono La Tabacalera		タバコ	Ernesto Pugibet Basagoit Zaldo	フランス人 フランス人 フランス人
CIDOSA	1889	木綿製品	Enrique Tron L. Signoret ほか数名 Thomas Braniff	フランス人 フランス人 イギリス人
Salinas y Rocha		家具	Joel Rocha Benjamin Salinas	メキシコ人 メキシコ人

（出所） Frank Brandenburg, *The Making of Modern Mexico* (Englewood Cliff., N. J., 1964), pp. 265, 266.

（注3） Raymond Vernon, *The Dilemma of Mexico's Development* (Cambridge, Mass., 1963), p. 44.

（注4） Albert Lauterbach, *Enterprise in Latin America* (Ithaca, 1966), p. 12.

（注5） Vernon, *op. cit.*, p. 156.

（注6） Henry G. Aubrey, "Industrial Enterprise in Underdeveloped Countries," *Conference on Capital Formation and Economic Growth* (Princeton, 1953), pp. 415～418；同著者の "Industrial Investment Decision: A Comparative Analysis," *Journal of Economic History*, XV (Dec. 1955), 335～357.

（注7） Gilberto Freyre, *The New World in the Tropics: The Culture of Modern Brazil* (New York, 1959), pp. 161, 162.

（注8） Simon G. Rottenburg, "Entrepreneurship and Economic Progress in Jamaica," *Inter-American Economic Affairs*, VII (2) (Autumn 1953), 74～79.

（注9） フロリダ大学 (University of Florida) の図書館とメキシコ各地（とくに，オリサバ市とメキシコ市）でのリサーチにより，筆者が収集した第1次およ

び第2次資料を使った。詳しくは，Mutsuo Yamada, *The Cotton Textile Industry in Orizaba: A Case Study of Mexican Labor and Industrialization during the Diaz Regime* (unpublished M. A. thesis. Gainesville, Fla.: University of Florida, 1965) 参照。その後，次の研究の発表により，筆者の研究はかなり容易になった。Luis Nicolau d'Olwer, *et al.*, *El Porfiriato: La vida económica* (2vols., Daniel Cosío Villegas, ed., *Historia moderna de México*, Mexico, D. F. and Buenos Aires, 1965). この書の欠陥の一つとして，フットノートなどの資料明示が行なわれていないことがあげられる。

(注10) George Wythe, *Industry in Latin America* (2nd ed., New York, 1949), p. 304; Diego López Rosado, "Breve historia de la industria textil algodonera de México," *Revista de economía*, XXII (5) (mayo 1959), 136.

(注11) Richard E. Greenleaf, "The Obraje in the Late Mexican Colony," *The Americas*, XXIII (3) (January 1967), 227～250.

(注12) Robert A. Potash, *El Banco de Avío de México* (México, D. F., 1955), pp. 20～23; Jan Bazant, "Evolución de la industria textil poblana (1544-1845)," *Historia mexicana*, XIII (julio 1963-junio 1964), 501～506.

(注13) Luis Chávez Orozco, "La industria de transformación (1821-1910)," *Transformación*, Año 1, No. 6 (dic. 1958), p. 20.

(注14) Francisco López Cámara, *Los fundamentos de la economía mexicana en la época de la Reforma y la Intervención* (México, D. F., 1962), pp. 67～72.

(注15) Potash, *loc. cit.*; Bazant, *op. cit.*, p. 508; Charles A. Hale, "Alamán, Antuñano y la continuidad del liberalismo," *Historia mexicana*, Vol. XI (julio 1961-junio 1962), pp. 221～226.

(注16) *Ibid.*, p. 231; Bazant, *op. cit.*, p. 507; Agustín Cue Cánovas, *Historia social y económica de México* (México, D. F., 1963), p. 357.

(注17) Hubert C. Herring, *A History of Latin America* (New York, 1964), pp. 343, 348.

(注18) Chester Lloyd Jones, *Mexico and Its Reconstruction* (New York and London, 1921), p. 177; Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 1, p. 465.

(注19) Ernesto Galarza, *La industria eléctrica en México* (México, D. F., 1941), p. 184.

(注20) 銀の価格指数は，1873年の100から，1902年の44.5に下がり，ペソの価値指数は，1873年の101.16から，1902年の44.65に下がった。David M. Pletcher, "The Fall of Silver in Mexico, 1870-1910, and Its Effect on American Investment," *Journal of Economic History*, XVIII (1) (March 1958), 38.

(注21) Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 1, p. 318.

(注22) 第1表では，操業中の工場数は97である。López Rosado, *op. cit.*, p. 134.

(注23) Nicolau d'Olwer, *et al.*, *loc. cit.*

(注24) Jones, *op. cit.*, pp. 199, 200.

(注25) Galarza, *loc. cit.*

(注26) Jan Bazant, "Industria algodonera poblana de 1800-1843 en Números," *Historia mexicana*, XIV (1) (julio-septiembre 1964), 136, 138.

(注27) Jan Bazant, "Estudio sobre la productividad de la Industria Algodonera Mexicana en 1843-45," *La industria nacional y el Comercio Exterior* (México, D. F., 1962), p. 33.

(注28) David Pletcher, *Rails, Mines and Progress: Seven American Promoters in Mexico* (Ithaca, N. Y., 1958), p. 26.

(注29) Chávez Orozco, *op. cit.*, p. 24.

(注30) Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 1, p. 456, Vol. 2, p. 1118.

(注31) Alfonso López Aparicio, *El movimiento obrero en México* (México, D. F., 1952), p. 103.

II　オリサバ地方の木綿工業における移民企業者の役割

1．ココロアパン工場のケース・スタディ（1836～1899年）

植民地時代のオリサバ地方は，メキシコの主要な木綿業中心地ではなかったが，その末期には，小規模ながら繁栄した木綿業が，おそらく，おもに，地元の需要を満たすために，存在していた

(注32)。これを支えた立地条件は，高い安定した湿度，豊富な水資源，当時の綿花の主産地であるベラクルス州低地への近接などであった。

すでに述べたように，1830年に興業銀行を設立したアラマンは，1836年に，ルグラン(Legrand)兄弟(フランス人か？身元不明)と提携して，この地方内にココロアパン(Cocoloapan)木綿工場を設立し，2年後から操業を行なった。この工場は，イギリスから輸入した設備をもち，当時のメキシコ国内の総錘数の半分以上にあたる1万1500錘をもち，創業資本は，24万1701ペソに達し，当時最大の規模を誇り，日産2000ポンドの繊維を生産した。同工場には，多数の外国人技師が雇われていた(注33)。

しかし，同工場の生産は，1842年ごろから減少し，翌年には，会社破産のため，操業停止に至った。創業者のアラマンらは，同工場を手ばなし，けっきょく，地元のエスカンドン(Escandón)兄弟の手に，その所有権は移った(注34)。同工場の生産は，1845年ごろから，ほぼ常態に回復した(注35)。1873年までの同工場の操業状態に関する具体的な資料は見いだされないが，各種の根拠から(注36)，1862年に始まるフランス軍の侵略以後，1873年に，メキシコ鉄道(Ferrocarril Mexicano)が，はじめて開通し，オリサバ地方を，主要港ベラクルスと首都メキシコ市と結びつけるまでの約10年間の期間には，同工場は本格的な操業を行なっていなかったことが推測される。

アラマンの企業者活動

アラマンは，メキシコ植民地の鉱業中心地グアナファト(Guanajuato)の名家に生まれ，独立前に，すでに，スペイン，フランス，ドイツなどで，自然科学とくに鉱業学を学び，独立後も，イギリスとフランスの資本導入によって，鉱山開発に努めた。ブスタマンテ政権の内相として，1830年興業銀行を設立したが，このころから，製造工業の重要性を認識していた。1834年に政界から表面的に引退したが，その後も，政治力を利用しつつ，オリサバの木綿工場のほかに，セラヤ(Celaya)にも，別の木綿工場を所有し，さらに，鉱山の経営に手を出すなど，盛んに実業活動を行なった(注37)。

アラマンは，ココロアパン工場の事業を始めるにあたって，ベラクルス州知事や同州出身の独裁者サンタ・アナ(Antonio López de Santa Anna)の支持を確保していた。プエブラの司教からは，日曜以外の宗教祭日には，労働を行ないうるという許可をとりつけていた(注38)。

ココロアパン工場の発足直後の破産は，クエ・カノバスによれば，自己資金の不足と，その結果，高利の融資を受け入れざるをえなくなったためであるとされる(注39)。同工場の危機が，1842年，すなわち興業銀行消滅の年におきたことから，これは首肯される。バサンは高賃金と低生産性のほかに，主要市場である首都への遠距離をあげ，さらに，アラマン自身の企業者としての能力の欠如を示唆している。「アラマンは，実践家というよりも理論家であり，かれ自身の事業に適切な注意を払わなかった」そして，「ココロアパン工場は有利な企業ではなかった」(注40)。

エスカンドン家の企業者活動

ココロアパン工場の新しい所有者となったエスカンドン兄弟は，地元の高利貸商人で，アラマンの弟子に近い存在であった(注41)。同兄弟は，ココロアパン工場の実際の経営を，マンチェスターからきたスコットランド人技師グランディソン(Thomas Grandisson)にまかせ(注42)，オリサバ地方への鉄道誘致と建設などの政商的な事業に大部分のエネル

ギーを費したように思われる。1873年までのココロアパン工場に関するデータは，すでに述べたように見いだされていないので，同年以後同工場がフランス系の CIDOSA に買収される1899年までのデータを検討したい。

エスカンドン兄弟の政商的活動によって実現したメキシコ鉄道の開通（1873年）は，ココロアパン工場を再生させた(注43)ばかりでなく，他の木綿工場の簇生と全般的な工業化をもたらした。ココロアパン工場の生産は，1873～75年の1年平均マンタ4万6968点，市販用の製糸量41万5467キログラムへと目ざましい上昇を示した。しかし，その後，

第4表　ココロアパン木綿工場の生産施設と生産実績（1873～1908年）

年	織機数	錘数	労働者数	マンタ点数	市販用製糸量(kg)	売上げ(ペソ)
1873—1875(a)	300	11,988		46,968	194,643	
1876(b)	400	7,000		75,000	415,467	
1877(c)	300	13,000				
1878(d)				59,000		
1884(e)				19,200		67,200
1890(b)			450	80,000		
1895(f)	234	9,176	338	2×64,386	2×38,312	2×180,000
1908(g)	417		380	300,000		900,000

（注）生産施設は，操業中のもののみを含む。ココロアパン工場は，1899年CIDOSAに買収された。

（出所）(a) Francisco R. Calderón, *La República restaurada: La vida económica* (Cosío Villegas, ed., *Historia moderna de México*, México, D. F. and Buenos Aires, 1955), p. 94.（年平均）

(b) Antonio García Cubas, *op. cit.*, p. 26.

(c) Nicolau d'Olwer, *et al.*, *El Porfiriato: La vida económica* (Cosío Villegas, ed., *Historia moderna de México*, México, D. F. and Buenos Aires, 1965), Vol. 1, p. 434.

(d) Manuel B. Trens, *Historia de Veracruz* (6 vols., México, D. F. and Jalapa, 1944–1950), vol. 1, p. 196.

(e) García Cubas, *Cuadro geográfico*, p. 28.

(f) *Anuario estadístico* (1895). "Cuadro sinóptico de la fábrica de hilados y tejidos de algodón……". 生産に関する統計は，半期のものであるため，2倍した。

(g) Mexico, Orizaba, Archivo General Municipal, *Directorio-1908*, "Sección de Estadística," 2–9 (junio 18 de 1908), p. 5.

しだいに，営業不振に陥り，ついに，1899年には，CIDOSA に買収された。CIDOSA の傘下で，ココロアパン工場は，同規模の生産施設によって，同工場にとって画期的な生産をあげた（第4表）。

この時点までに，エスカンドン兄弟は，「『自由派』(Liberal) であれ，『保守派』(Conservador) であれ，権力を攻撃，獲得した政権の命運の所有者，支配者」(注44)とまで呼ばれる「メキシコ国内で，最も富裕な銀行家，地主」(注45)になっていた。この事実とココロアパン工場の実績を結びつけて考えれば，当時の諸条件のもとで，エスカンドン兄弟は，木綿工業においては，企業者としての能力を十分発揮しなかった，というべきであろう。なお，同家は，ココロアパン工場の売却後，本拠をメキシコ市に移している。

次に，エスカンドン兄弟の政商的活動や，木綿工業以外の分野における企業者活動については，比較的に資料に恵れているので，略説しよう。同兄弟は，アントニオ (Antonio)，マヌエル (Manuel)，ラファエル (Rafael) の3人からなっていた。

次兄のマヌエルは，すでに，1830年，かれが22歳のときに，メキシコ市とプエブラ市を結ぶ馬車便を開設しており，他方，各地に，鉱山，農園，織維工場（1840年代から，ハリスコ州エスコバ〈Escoba〉の同名の工場）を所有しており，それらの事業と関連して，何度か，ヨーロッパに旅行しており(注46)，19世紀の後半には，「メキシコの大企業者」(注47)の1人であった。1836年には，かれは，ベラクルス州議会に，ベラクルス港とメキシコ市を結ぶ鉄道建設を提案したが，その鉄道がオリサバを通り，競合的な路線上にある州都ハラパ (Jalapa) を通らないため，後者出身の議員の反対にあい，議会の承認を得ることができなかった(注48)。かれの動機は，エスカンドン家が，オリサバ地方に，大

農場サンタ・アナ (Santa Ana) を所有していた(注49)事実だけから説明できず，同家が，すでに，ココロアパン工場に，その発足時から，なんらかの利害関係を有していたためと推測される。いずれにしても，のちに，アントニオが，完成に導いたメキシコ鉄道は，オリサバを通りながら，当時のメキシコの第3の大都市であり，オリサバとならんで重要な繊維工業の中心地プエブラ市を迂回しているのであり，同家は，メキシコ市以西の鉄道建設には，全く興味を示さなかったのである(注50)。

1857年になって，長兄のアントニオは問題の鉄道建設の権利を政府から承認され，汚職の非難を受けながら，多額の補助金と長期低利の融資を受けることに成功した。しかし，この計画の実現は，内戦のために妨げられ，1861年になってオリサバ—ベラクルス鉄道会社(Compañía del Ferrocarril de Orizaba a Veracruz) が発足した。同社の発起人には，アントニオとマヌエルのほか，ココロアパン工場の工場長グランディソン，オリサバ出身の州知事リャベ (Ignacio de la Llave)，沿線のベラクルス，コルドバ (Córdoba)，オリサバの町会 (ayuntamiento) が名をつらねていた(注51)。

1863年に，フランス軍が，ベラクルスから侵入し，戦火のために，政府の保護を期待できなくなると，1864年に，アントニオは，ロンドンに渡り，メキシコ帝国鉄道会社 (Imperial Mexican Railway, Compañía Imperial de Ferrocarril) を組織し，自己の建設権を同社に譲渡した形式をとりながら，有力株主として同社の役員に就任した。フランス軍は，作戦の必要からベラクルス港と首都を結ぶ鉄道の完成に積極的な援助を与えた。

1867年にマキシミリアン (Maximilian) が降服，処刑され，戦争が終わると，アントニオは同社をメキシコ鉄道会社 (Ferrocarril Mexicano) と改名し，メキシコ側重役の1人として留任した。エスカンドン兄弟が，フランス軍の侵入に際して協力したこと，鉄道建設に外資導入をすることを禁ずる法令に違反したことは反逆行為とみなされたが，メキシコ最初の鉄道建設の急務のため，公的な追求は差しひかえられた。こうして，1873年メキシコ鉄道は開通して，オリサバ地方はベラクルス港と首都に結びつけられた。マヌエルは1862年に，アントニオは1877年に死亡したが，後者の息子パブロ (Pablo) が，メキシコ鉄道会社内の父の地位を継承した(注52)。

エスカンドン兄弟の末弟ラファエルは，1887年から1899年まで，ココロアパン工場の経営を直接担当したが，この期間の後半に，オリサバ市長 (Jefe Político：州知事任命の官選市長) を勤め，1890年代に，同地方内の主要工場に導入され始めた電力を，一般の照明用として，普及させることに努めた(注53)。また，エスカンドン家の親族の1人 (Ángel Jiménez Argüelles) は，1887年に，同市に，はじめて路面電車を導入し，事業化することに成功した。19世紀の終わりには，この電車は，オリサバ地方のすべての木綿工場の所在地を結びつけていた(注54)。

2. オリサバ工業株式会社 (CIDOSA) のケース・スタディ (1889～1911年)

1873年のメキシコ鉄道の開通は，オリサバ地方に，主要市場メキシコ市への接近を与え，同地方の木綿工業の有利な立地条件は，完成した。たとえば，アラマンがすでに着目した豊富な水資源は，おりから電力導入期にあった木綿工業の発達を助け（第5表），1900年には，同地方は，メキシコの木綿工業の中心地のなかでも，最大の電力消費者であった(注55)。

すでに述べたように，ココロアパン工場の生産は1876年ごろまでは上昇を続けた。1881年には，イギリス人ブラニフ (Thomas Braniff) が同地方内にサン・ロレンソ (San Lorenzo) 木綿工場を建設し，1883年から操業を始めた[注56]。1882年には，ドイツ系と思われる人物 (Wiechers という名前以外身元不明) が，セリートス (Cerritos) 木綿工場を設立した。同工場は，4年後に首都に繊維製品の卸・小売店をもつフランス移民商人のシニョレー・ブルジャク (Signoret Bourjac) 商会に買収された。

1889年に，メキシコ市に本社をおくオリサバ工業株式会社が，メキシコ木綿工業界最初の株式会社として，設立された。同社の発起人には，セリートスとサン・ロレンソの2工場の所有者2名が，首都のフランス移民商人数人と提携して参加していた[注57]。1892年，同社は，オリサバ地方内に，リオ・ブランコ (Río Blanco) 木綿工場を新設した[注58]。また，ラファエル・エスカンドンの経営下で，しだいに営業不振に陥っていたココロアパン工場は，1899年に，CIDOSAに合併された。このような急速な拡大の結果，同社のメキシコ木綿工業におけるシェアーは，1895年から1910年の期間に，織機台数では，約12%から約16%へ，労働者数で，約12%から約19%へ，売上げで，約15%から約17%へと上昇した（第6表）。また，1910年には同社の資本規模は，フランス系の木綿製造企業としては，最大であった（第7表）。

1898年には，CIDOSAの成功を追うようにして，同じく，首都に繊維製品の卸・小売店をもつフランス移民商人の出資とイニシアティヴによるベラクルス工業株式会社(Compañía Industrial Veracruzana, S. A., 略称 CIVER) が発足し，2年後に，新設のサンタ・ロサ (Santa Rosa) 木綿工場の操業を始めた。CIVER は，1910年にはフランス系の木綿企業としては，全国4位の資本規模をもった（第7表）。すでに述べたように，メキシコの木綿工場数の増加は，1900年で一応のピークに達したが，オリサバ地方でもサンタ・ロサ工場以後今日に至るまで木綿工場の新設は行なわれていない。

オリサバ地方の木綿工業，とくに CIDOSA 傘下の工場においては，1900年をはさむ約20年間に高い利潤を高率で再投資することによって，生産設備の近代化が行なわれた。高い利潤率は合理的経営，高生産性，生産から販売に至る垂直統合的独占の形成という革新行為に対する代償であった（第8表）。ただし，この過程では，1907年の有名なリオ・ブランコの「ストライキ」における数百人の労働者の死傷という不祥事もおきた。CIDOSA の労務管理は，土着企業者の経営するココロアパン工場に比べてはるかに合理的である一面，より搾取的で，工業労働に慣れきっていない労働者にとって，パターナリスティックな考慮に欠けていたと思われる根拠がある[注59]。

こうして，オリサバ地方の木綿工業の同産業全体に対する比率は高まった。錘数の比率は，1876年の6%強から，1910年の19%強に上昇した。1910年には，オリサバの木綿工場の労働者は，全国木綿工業労働者の実に25%にも達した（第6表）。すでに述べたように，同年には，CIDOSA, CIVER を含むフランス系の4企業が，全国木綿生産の50%を生産していたので，オリサバ地方は，木綿業におけるフランス移民企業者の活動の典型といってよかった。

フランス移民らの企業者活動

CIDOSA の発足時の重役会 (Consejo de Administración) は，創業者である主要株主で構成されていた。その成員には，セリートス工場の所有者

第 5 表　オリサバ地方の木綿工業（CIDOSA と CIVER）の発展(1888~1910年)

年	錘数	織機数	労働者数	マンタ点数	製糸量(kg)	売上げ(ペソ)	備考
1888				15,000			Cerritos (a) (まだ CIDOSA に買収されず)
1890			196	26,000			Cerritos (b)
			470	100,000			San Lorenzo (b)
			666	126,000			CIDOSA 全体
1892	42,000	1,000					Río Blanco (c)
1895	6,780	181	300	234,626 (117,313×2)			Cerritos (d)
	16,436	420	475	280,894 (140,447×2)			San Lorenzo (d)
	34,480	1,018	1,500	561,748 (280,874×2)		3,450,584	Río Blanco (d)
	57,696	1,619	2,275	1,077,268		(1,725,292×2)	CIDOSA 全体
1897				757,000	480,000	2,000,000	Río Blanco (e)
1898	33,000	1,400					Santa Rosa (CIVER) (f)
1903			500	360,000			Cerritos (g)
1907			520	350,000		1,000,000	Cerritos (h)
	75,000	3,700	6,000			8,518,307	CIDOSA 全体 (i)
	33,000	1,400	1,800			3,407,325	Santa Rosa (CIVER) (i)
1910	100,000	4,000	6,000			8,500,000	CIDOSA 全体 (j)
	40,000	1,400	2,000				Santa Rosa (CIVER) (j)

(注) ココロアパン工場の統計については，第4表を参照のこと。同工場は，1899年に CIDOSA に合併されたので，本表では，1907年から，同社の統計に含まれている。

(出所) (a) セリートス工場の記録。

(b) Antonio García Cubas, *Mexico, Its Trade, Industries and Resources* (English tr. by William Thompson, México, D. F., 1893), p. 101.

(c) *El Tiempo*. 1892年10月11日。

(d) Mexico, *Anuario estadístico* (1895), 付表, "Cuadro sinóptico……".

(e) Julio Zarate, "El Estado de Veracruz de 1897……," *Boletín de la Sociedad Mexicana de Geografía y Estadística*, IV Época, IV (1897), p. 36.

(f) Nicolau d'Olwer, *et. al.*, *op. cit.*, Vol. 1, p. 434.

(g) Mexico, Orizaba, Archivo General Municipal, *Directorio* (1903), "Sección de Estadística," IX 3, 4.

(h) *Ibid.* (1908), "Sección de Estadística," II, 9, p. 7.

(i) Chávez Orozco, *op. cit.*, p. 63.

(j) Adolfo Dollero, *México al día* (México, D. F., 1911), p. 785; Lobato López, *op. cit.*, 135; Ernesto Galarza, *La industria eléctrica en México* (México, D. F., 1941), p. 184.

第 6 表　メキシコの木綿工業全体に対するオリサバ地方の重要性(1895, 1907, 1910年)

年		錘数	織機台数	労働者数	マンタ点数	売上げ(ペソ)	工場数
1895	(1) CIDOSA	57,696	1,619	2,275	1,077,268	3,450,584	3
	(2) M	428,560	12,974	19,575	9,122,772	23,657,533	110
	(1)/(2)(%)	13.46	12.48	11.62	11.81	14.59	
1907	(1) CIDOSA	75,000	3,700	6,000		8,518,307	4
	(2) CIVER	33,000	1,400	1,800		3,407,325	1
	(3) O	108,000	5,100	7,800		11,925,632	5
	(4) M	732,876	24,997	35,816		51,689,954	129
	(1)/(4)(%)	10.23	14.80	16.75		16.48	
	(2)/(4)(%)	4.51	5.60	5.03		6.59	
	(3)/(4)(%)	14.74	21.40	21.78		23.07	
1910	(1) CIDOSA	100,000	4,000	6,000		8,500,000	4
	(2) CIVER	40,000	1,400	2,000			1
	(3) O	140,000	5,400	8,000			5
	(4) M	725,297	24,436	32,147		50,651,358	123
	(1)/(4)(%)	13.79	16.37	18.66		16.78	
	(2)/(4)(%)	5.51	5.73	6.23			
	(3)/(4)(%)	19.30	22.10	24.89			

(注)　Oはオリサバ地方の木綿工業全体，Mはメキシコの木綿工業全体を表わす。

(出所)　第1表および第5表。

第7表　1910年のメキシコのフランス系木綿企業8社の資本規模

企業名	名目資本額(ペソ)	平均株価(フラン)
Industrial de Orizaba (CIDOSA)	15,000,000	380
Industrial Veracruzana (CIVER)	3,500,000	500
Industrial San Ildefonso	3,000,000	180
Industrial de Guadalajara	2,000,000	150
Industrial de Atlixco	6,000,000	245
Industrial de La Teja	4,300,000	125
La Perfeccionada	1,000,000	300
La Abeja	500,000	300
計	35,300,000	

(注)　これら8企業の資本総額の5分の4が，フランス系企業者に属し，本国からの投資は，1400万ペソにすぎなかった。

(出所)　Nicolau d'Olwer, *et. al.*, *op. cit.*, Vol. 2, p. 1117.

シニョレー・ブルジャク商会，サン・ロレンソ工場の所有者ブラニフのほか，トロン(Enrique Tron), エブロー (J. B. Ebraud), レイノー (Reynaud), ランベール (Mateo Lambert), ガルサン (Eduardo Garcin), フォードン (Faudon), オリビエー (Joseph Olivier), ルー (Eugenio Roux) などのフランス移民商人が含まれていた(注60)。社長 (上記 Consejo の

第8表　CIDOSA と CIVER の株式配当(1889~1911年)(%)

年	CIDOSA	CIVER
1889	5	
1890	10	
1891	10	
1892	10	
1893	15	
1894	20	
1895	25	
1896	16	
1897	18	
1898	20	
1899	20	
1900	16	15
1901	—	—
1902	12	—
1903	12	—
1904	12	—
1905	12	12
1906	14	13
1907	14	13
1908	8	13
1909	8	13
1910	8	13
1911	8	12

(注)　CIDOSA は1889年，CIVERは 1900年に，それぞれ発足した。

(出所)　Nicolau d'Olwer, *op. cit.*, Vol. 1, p. 462.

Presidente) には，トロンが就任した(注61)。

トロンは，CIDOSA の他のフランス系企業者と

同じく，19世紀中葉に，南フランスのバルスロネット(Barcelonette)から，メキシコに移住した男であり(注62)，他の多くの同郷人と同じく，おもに，繊維製品などの商業で成功し，19世紀末には，首都で，同製品の卸・小売の有名店 Portal de las Flores と，1891年に，メキシコ最初の百貨店として，設立された Palacio de Hierro を所有，経営していた。Palacio は，創立後まもなく，株式会社となり，1910～11年には，その資本は，フランス移民の商店としては，最大の1875万フランになり，その株価は，額面の125％に達した。なお，同年のフランス人の商店の総資産の評価額は，約2億フランであった(注63)。

トロンは1880年代までにメキシコにおける商業活動によって蓄積した自己資本を基盤に，CIDOSA のほかにも多種広範な事業を行なった。かれの主要な提携者は，1875年に発足し，1894年に創業資本100万ペソで株式会社に改組されたタバコ会社 El Buen Tonoの所有者であるピュジベー(Ernesto Pugibet)，CIDOSA の共同出資者エブロー，CIVER の創業者の1人レイノーらで，このグループは，各種事業の共同創業者としてしばしば名をつらねた。トロンが，有力株主，重役として関係した事業は，CIDOSA, El Buen Tono のほか，オリサバの大ビール会社 Cervecería Moctezuma，火薬工場 Nacional de Dinamitas y Explosivos，製紙工場 San Rafael，亜麻工場 San Ildefonso(1895年設立，創業資本130万ペソ)などを含んでいた(注64)。

注目すべきことであるが，トロンは，1890年から，ピュジベーとならんで，メキシコ工業金融会社(Société Financière pour l'Industrie au Mexique)のメキシコ側重役の1人となっていることである。同社は，1890年，メキシコ市，パリ，ジュネーブに事務所をおき，メキシコの製造工業に，メキシコからの帰郷者などの資本を中心とするフランスとスイスの資本導入を行なうことを目的としており，トロンとピュジベーらの事業のほとんどに対して，小規模ずつではあったが，融資を行なっていた。ただ，同社の資本は，1910年になっても，500万フラン(200万ペソ)にすぎなかった(注65)。

レオン・シニョレーは，CIDOSA のほかにも，1900年に，モンテレイ(Monterrey)市に設立されたメキシコ最初の近代的製鉄所(Compañía Fundidora de Fierro y Acero de Monterrey, S. A.)の重役であり，同社の資本1000万ペソの4分の1を所有していた(注66)。レオンの製鉄業への投資は，フランス鉱業資本との関係の可能性も考えられるが，商業資本家が，かれの商業活動に関連する国内市場向けの消費財工業のみならず，無関係の部門における生産財工業にも，活動を拡大した事例として注目される。シニョレー家のアレグル(Allegre)は，首都の有名繊維商店，Al Puerto de Veracruz の所有者であり，ホセ(José)は，トロンの Palacio の共同出資者だった(注67)。その他のフランス移民出身の CIDOSA の創業者のなかでは，首都の有名繊維商店 Al Puerto de Liverpool の所有者エブロー家が目だっている(注68)。

CIDOSA の創業者の間で，唯一のイギリス人であるブラニフは，ジェナンによれば，アメリカ国籍をもっていた(注69)とされるが，各種の根拠から，メキシコに定住したイギリス人と思われる。かれがオリサバ地方に利害関係をもつのは，かれが1868年からメキシコ鉄道の工事総監督として働き(注70)，同線の完成後は，1905年まで，同社の社長となったためである。かれはメキシコ・ロンドン銀行(London Bank of Mexico)の頭取をも勤め(注71)，1891年からは，メキシコ・ガス電力会社(Compañía Mexicana de Gas y Electridad)の重役で

もあった[注72]。かれは CIDOSA のみならず，フランス系の San Rafael 製紙工場，San Ildefonso 亜麻工場にも有力株主，役員として関係し[注73]，レオン・シニョレーと同じく，モンテレイの製鉄会社の重役をも兼ねた[注74]。これは，かれとCIDOSA のフランス移民企業者との強い人的・資本的な結びつきを示している。

CIVERの創業者については，資料が不十分であるが，それがフランス移民だけからなり，ピュジベー，トロン，エブローらとしばしば提携したレイノーが，1896年に，ケール (Eugenio Caire) らと提携して，資本金335万ペソのサンタ・ロサ工場を建設し始めた[注75]，ことは注目に値する。

以上のように，地理的かつ業種面において広範な分野に大規模な投資を短時日のうちに次々と行なった，CIDOSA関係のフランス移民企業者の企業者活動と精神は，目ざましいものがあった。とくに，ディアス期に行なわれたメキシコの初期的工業化が，農牧鉱など輸出向け第1次産品の製品加工と，それに関連する鉄道などのインフラストラクチァーの建設を主軸にしていたことを考えれば，繊維，ビール，製紙，タバコ，製鉄，火薬などの国内市場向けの軽および重化学工業に大規模な投資を行なった，かれらの積極性は，十分評価されなければならない。

次に，これらのフランス移民企業者の背景，とくに，かれらの企業者活動の文化的，経済的背景（文化的諸要因，資本蓄積，市場に対する支配力など）を明らかにするために，(1) メキシコにおけるかれらの第1次的企業者活動の分野であった商業における経験，(2) かれらの第2次的企業者活動の分野である製造工業における活動開始の際，どの程度本国からの融資に依存したか，の2点に焦点をしぼって考察を進めたい。

フランス移民の商業における企業者活動

革命前のメキシコへのヨーロッパ系の移民は，わずかに数十万であり，他のラテン・アメリカ諸国，とくに南アメリカ南部に比べれば問題にならないほど少数である[注76]。しかし，これらの少数の移民は，19世紀に，卸，輸入などの商業活動において支配的な地位を確立した。かれらは，おもに出身別に集団をつくり，専門とする業種や機能の「住み分け」を行なった。

1821年にメキシコが独立し，貿易に対するスペインの重商主義的統制から解放されると，当時の工業先進国イギリスの商人が，輸入，卸売の分野で，しだいに独占的な地位を築きあげた。1789年まで，コンスラード (consulado) という輸入，卸売業者の独占的ギルドが，植民地生まれの商人を排除していたため，独立前後にも，これらの分野で支配的な地位を維持していたスペイン人が，1827年に追放されたので，この傾向は強められた。しかし，1830年代にはいるとイギリス商人の一部はより有利な銀行業に進出し，その間隙にドイツ人が進出した[注77]。

フランス人も独立直後から移住を始めているが，かれらは資本も特殊の技能ももたぬ農民であったため，初期には商業の中心的な分野においてなんら重要な役割を果たしていない。かれらの大多数の出身地は，南フランスの低アルプス (Bas Alpes) 地方の山間（高度海抜1135メートル）の天候に恵まれぬ一寒村バルスロネットであった。この村の人口は，1892年になっても，わずか，2200人であった。この村からのメキシコ移住者の先駆者は，1821年にメキシコ市に到着したアルノー (Arnaud) 兄弟ほか少数の人々であった。アルノー兄弟は，洋品店 El Cajón de Ropa de las Siete Puertas を開いた。この商店は，バルスロネットから呼びよ

せた独身の青年を数年間，店員として雇い，訓練した。

これらの青年のなかから，ケール (Caire) とジョーフル (Jauffred) のように，数名で協力して，新たな小売店 (cajón) を開き，独立するものが出現した。かれらが開いたフランス移民による第2番目の洋品店が，のちに，トロンの経営にまかされる Portal de las Flores であった。

一方，アルノー兄弟は，かなりの財産を携えて故郷に帰り，同郷人のメキシコ移住を促した。こうして，メキシコにおけるフランス人は，別名 "barceloneta" と呼ばれるほど，この地方出身の移民が多くなった。かれらは，勤勉と高い商業道徳で知られるようになり，成功者を多く出した。1842年には，バルスロネット系の第3の洋品店が発足した(注78)。

1845年に，ケールとジョーフルが，成功者として，バルスロネットに帰郷すると，メキシコ移住熱は，さらに高まった(注79)。この時から，1863年に始まるフランスの対メキシコ干渉戦争までの約20年間に，多数のバルスロネット人の移住が行なわれ，初期の出稼移民の段階から，定着移民の段階にはいった。CIDOSAの関係者をみても，エブロー，トロン，シニョレー，オノラー，レイノーらは，この時期の移住者であり，ランベール，ガルサン，ルーらは，少し遅れて呼びよせられた上の諸家の親族であるとされている。これらの移民は，すでに述べたように，同郷の先輩や親族の店で数年間働き，そこで蓄積した少額の資本，信用，知識，経験を元手に，首都や各地の主要都市に，新たに洋品店や雑貨店を開いた(注80)。これらの商店は，資本や信用や，情報などの面で，相互扶助を行なったと思われる。

しかし，バルスロネット商人の活躍した分野は，1875年ごろまで小売業に限られた。1850年代末に，卸売業の3分の2はドイツ人の手中にあり(注81)，1871年になっても，メキシコの輸入の90%もが，ドイツ人輸入業者の手を経ていた(注82)。フランスの対メキシコ侵略の失敗後，メキシコは，フランスのみならず，干渉支持国のイギリス，スペインとも国交を断絶（王政廃止をしたスペインとは比較的早く国交を回復し，1868年まで，フランスとは，1880年までイギリスとは，1884年まで）を行ない，その期間に，「中立国民」であったドイツ商人は，イギリス商人の地位を奪うことができたからである。

フランスの移民商人は，1875年ごろからようやくドイツ人の繊維製品の卸売独占に挑戦し始めた。これは，ヨーロッパにおけるフランス―プロシア戦争の余波として，メキシコ在住のフランス人とドイツ人の間が不和になったことを契機としていた。おりから，アメリカ合衆国やヨーロッパ諸国の工業化の進展の結果，国際工業製品の国別の分業，特化が進み，メキシコに対するドイツの輸出は相対的に低下し続け，メキシコのドイツ人輸入業者を苦境に追いやっていた。

けっきょく，「ドイツ商人，とくに，ハンブルグ出身の商人よりも，より少ない利幅と，より質素な生活で満足している」(注83)フランス人商人が，前者の地位を徐々に侵蝕した。フランス移民商人の代表的な成功者トロンの生活ぶりは，この説明と一致する。かれの知人であるオリサバ在住のフランス人によれば，かれは成功後も，つねにセルロイドのカラーと鳥打帽子を愛用し，「金持に見られること」を恐れていた(注84)。こうして，1880年には首都に16のフランス系の卸兼小売店が進出していた(注85)。

1880年代にはいると，フランス移民商人の活動は第3の段階に達した。1880年には，メキシコと

フランスの間の国交回復が行なわれ，メキシコから本国に帰った商人の一部が，パリからメキシコの同郷人に融資をしたり，フランスの高級繊維品などを長期の延払いで輸出することが可能になった。

しかし，メキシコのバルスロネット商人が，本国との関係を活用する機会は少なかった。1882年ごろから，メキシコは国際収支の困難に悩まされ始め，中級以下の繊維製品の輸入は禁止され，国内生産による代替はほぼ完全に行なわれた。バルスロネット商人は，少量の高級繊維製品の輸入を続ける一方，中級以下の繊維製品は，国内のイギリス人，ドイツ人の製造業者から買い入れることになった。1883年には，このような状況下で，フランス系の大卸売業者の一団が，国内で生産されるプリント地の投機的買占めをはかるという事態まで生じた(注86)。

こうして，首都のバルスロネット商人の主流が，メキシコ鉄道と水力という立地条件に恵まれたオリサバ地方に着目した。1886年にセリートス工場を買収して，バルスロネット商人の製造工業への進出の口火を切ったシニョレー商会は，首都に大商店をもち，3年後に，同商会の参加を得て，結成されたCIDOSAも，トロンの社長就任に象徴されるように，バルスロネット商人の主流を含んでいたのである。かれらは，本国に帰った同郷人の資本をも活用した。

ロメロとジーランドのメキシコ木綿工業史の概観によれば，「メキシコの繊維工業の発展には特色があり，アトヤック会社 (Organización Atoyac) と1，2のより重要でないものを例外として，国内のほとんどすべての木綿工場が，洋品小売業の成長したものである。」そして，「今日〔1940年ごろ〕では，El Centro Mercantil, El Palacio de Hierro, El〔実際は Al〕Puerto de Veracruz のような大百貨店や大洋品店は，いずれも，自店のみに〔商品を〕供給する，一つないしそれ以上の工場をもっている」(注87)。

この結果として，1891年に，メキシコ国内にあった191のフランス系商店のうち，70店までが，なんらかの形で，繊維製品を取り扱っておりながら，フランス系商店の年間総売上げ，約1億5000万フラン（約3333万3000ペソ）の実に5％のみが，フランス本国からの輸入品であった(注88)。

こうして，今日に至るまで，メキシコの木綿工業を特色づけている，生産から販売までの垂直統合的産業構造は，19世紀末のバルスロネット移民商人の革新的企業活動の結果，形成された。CIDOSA，CIVER の創業者たちの多様広範かつダイナミックな企業活動と考えあわせれば，バルスロネット移民商人たちが，「商業資本的」地位に安住していなかったことは明らかである。

フランス移民企業者と本国からの投資の役割

19世紀末のメキシコの木綿工業の発展に貢献したフランス移民商人の企業者活動は，実はかれらの独特の企業者精神よりは，本国からの投資に依存するところが大であったのではないか？ かれらの商業と工業における活動とフランス投資との関係を考察しよう。

メキシコへのフランス投資は，1860年代以前には，公債購入と一部の鉱山への直接投資に限られていた。ナポレオン3世のメキシコ侵略は，1867年から1880年まで，両国間の国交断絶をもたらしたが，国交回復とともに，すでにメキシコ市場への関心を強めていたフランス上層ブルジョワの資本は，メキシコ政府のアメリカ資本牽制政策を利して，能力いっぱいの経済進出を行なった。フラ

ンスの投資の主要経路としては，1864年に，フランス軍占領下につくられた Banco de México のほか，Banque de l'Union Parisienne と Banque de Paris et des Pays-Bas があり，公債，鉱業，鉄道，銀行などへの間接投資を中心に行なった(注89)。しかし，商業，工業への投資は，これらの大銀行を経由しては，ほとんど行なわれなかった。

ここで注目すべきことは，投資総額では，アメリカ，イギリスがフランスを上回っていたのにもかかわらず，商業，工業の分野では，「フランス資本」が，それら2国の投資額を上回っていることである。これは，当時の統計では，外国投資の中に，移民の資産が含められたためである。活発な企業者活動を行ない，利潤を高い率で再投資した移民の存在が見落とされてはならない（第9，10，11表)。

この結果，第12表に明らかなように，メキシコ

第9表　1911年の対メキシコ外国投資の構成

国名	投資額(ペソ)	比率(%)
アメリカ合衆国	2,609,322,540	59.2
イギリス	847,760,000	19.2
フランス	647,132,000	14.7
その他の諸国	303,799,450	6.9
計	4,408,013,990	100.0

(出所) Nicolau d'Olwer, *et al., op. cit.*, Vol. 2, p. 1153.

第10表　1911年の対メキシコ・フランス投資の部門別構成

部門	投資額(1000ペソ)	比率(%)
公債	328,132	36.1
鉱業	179,552	19.8
鉄道	116,240	12.8
銀行	99,994	11.0
商業	80,000	8.8
工業	71,932	7.9
その他	32,840	3.6
計	908,690	100.0

(出所) Nicolau d'Olwer, *et al., op. cit.*, Vol. 2, p. 1141.

第11表　1911年のメキシコにおけるフランス投資利潤の部門別平均再投資率(推定)

部門	再投資率(%)
農業	75
商業	75
鉱工業	20
公債	10

(出所) Nicolau d'Olwer, *et. al., op. cit.*, Vol. 2, p. 1156.

の商業に対する外国投資の中では，「フランス資本」が，約66%を占め，最大の比率を示した。しかし，フランス本国からの資本流入の総額は，商業における「フランス資本」の4分の1程度にすぎなかった(注90)。すなわち，「フランス資本」とされた商業資産の大部分は，移民商人によって，メキシコ国内で，蓄積され，再投資によって，拡大したものであった。

第12表　メキシコの商業に対する外国投資の国別構成(1910年の推定)

国名	投資額	同(ペソ換算)(1000ペソ)	比率(%)
フランス	200,000,000フラン	80,000	65.6
アメリカ(合)	4,480,000ドル	8,960	7.4
イギリス	140,000ドル	280	0.3
その他諸国	16,445,000ドル	32,890	26.7
計		122,130	100.0

(出所) Nicolau d'Olwer, *et al., op. cit.*, Vol. 2, p. 1125.

次に，バルスロネット商人が，CIDOSA に代表される木綿工業に，大規模な投資活動を行なった際，どの程度フランス本国からの投資に依存したかを調べたい。ここでも，商業の場合と同じく，フランス移民の資産は，それが，メキシコで蓄積されたのと，本国から送金されたのとを問わず，一率に，「フランス資本」と分類された事実に注意を払わなければならない。

バルスロネット移民の活動のため，メキシコの製造工業に投資された外国資本のうちで，「フラ

ンス資本」は1位の55%強に達した（第13表）。その投下の規模が，最も大きかったのは，今世紀のことである（第14表）。

第13表 メキシコの製造工業に対する外国投資（1910年の推定）

国名	投資額	同(ペソ換算)	比率(%)
フランス	218,137,500フラン	71,932,368	55.2
ドイツ	—	26,960,000	20.5
アメリカ(合)	10,600,000ドル	21,200,000	16.1
イギリス	200,000ポンド	—	—
その他諸国	4,477,900ドル	10,855,800	8.2
計		130,948,168	100.0

（出所） Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 2, p. 1121.

第14表 メキシコの製造工業に対する「フランス資本」（1867～1911年）

期間	額(フラン)	交換率	換算額(ペソ)
1867～79年	5,000,000	5.5	909,090
1880～98年	80,000,000	4.5	17,777,778
1899～1911年	133,137,500	2.5	53,245,500
計	218,137,500		71,932,268

（出所） Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 2, p. 1119.

以上は，次の指摘と一致する。すなわち，バルスロネット商人のオリサバ地方への進出が，「ここ〔メキシコ国内〕だけで，所有する資本の大部分を蓄積した外国人居留民（extranjeros residentes）〔移民〕が，………，製造工業に対して行なった最初の外国投資（原文のまま）」の「第1歩」(注91)であるという事実である。

当時のメキシコの木綿工業全体については，本国からの投資の役割が，商業の場合に比べれば，より重要であるかと思われる。1910年には，CIDOSA，CIVERを含むフランス系の繊維工場8は，3530万ペソの資本をもっていたが，そのうちで，「フランス資本」の比率は，5分の4（2800万ペソ）で，さらに，その半分（1400万ペソ）は，フランス本国からの資本で，残りは，メキシコで蓄積されたのであった(注92)（第7表）。しかし，CIDOSAの場合は，本国からの資本に依存する度合は，後述するようにきわめて小さい。

すでに述べたように，政府の保護関税，中級以下の繊維製品の輸入禁止，電力導入と機械の近代化による生産性の向上，労働運動の抑圧，消費の増大などの諸要因によって，20世紀初頭まで，メキシコの木綿工業は高い利潤率に恵まれており，1895年にペニャフィエル（Peñafiel）が述べたように，それは「年率で，資本額の12から15%で，10%を下回ることはけっしてなかった」(注93)のである。また，「1901年には，最も効率的な工場では，利潤率は40%に達した」(注94)ので，最も大規模な工場と，生産から販売までの垂直統合的独占を形成したCIDOSAなどのフランス系木綿工場の資本蓄積は，かなり容易であったと思われるのである。

さらに，オリサバの木綿工業の資本蓄積における外資の役割を，具体的に考察したい。CIDOSA

第15表 CIDOSA，CIVERの創業資本と増資の過程（1889～1910年）（単位：1000ペソ）

年	CIDOSA	CIVER
1889	2,550(a)(創業資本)	
1896	6,500(b)	
1898	—	3,350(d)(創業資本)
1907	8,500(b)	3,350(e)
1908	15,000(b)	—
1910	15,000(c)	3,350(a)

（注） CIDOSAは，1889年設立，CIVERは，1898年設立。
（出所） (a) Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 1, p. 454.
(b) *Ibid.*, Vol. 2, p. 1116.
(c) Dollero, *op. cit.*, p. 961.
(d) Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 1, p. 455.
(e) Chávez Orozco, *op. cit.*, p. 63.

と CIVER の創業資本と増資の過程は，第15表のようである。

資料が限られているが，CIDOSA について，外資導入の状況をみよう。CIVER は，革命前の時期には，一度も増資を行なっていないし，資料も利用できないので，対象としない。

1889年に発足した CIDOSA の初期の資本の一部（量不明）は，1年遅れて，1890年に発足したメキシコ工業金融会社を経由したメキシコからの帰郷者の資本を中心とするフランス本国からの資本であった。金融会社を通じての本国からの投資は，CIDOSA の結成前でなく，後に，一時の重要性をもったことは否定できないが，しだいにその重要性を減じていった。1910年には，CIDOSA の資本は，1500万ペソ（=3750万フラン）であり，すでに述べたように，CIDOSA 以外の各種企業に融資を行なっていた金融会社の資本は，総額わずか500万フランにすぎず，CIDOSA の資本の約7分の1に相当するのみであった。けっきょく，フランス本国からの投資は，CIDOSA のバルスロネット移民企業者の資本調達能力を含む企業者精神の反映であれこそすれ，かれらが他のグループ以上に成功できた事実の原因とはいえないであろう。

（注32） 19世紀の2人の地元の歴史家による。Joaquín Arróniz, Jr., *Ensayo de una historia de Orizaba* (1st ed., Orizaba (?), 1867, 2nd ed. 2vols., México, D. F., 1957), Vol. 2, p. 194; José María Naredo, *Estudio geográfico, histórico y estadístico del cantón y de la Ciudad de Orizaba* (2vols., Orizaba, 1898), Vol. 2, p. 16; 植民地時代末期および近代的木綿工業導入直後のオリサバ地方の木綿手工業の規模は，次表から，知られる。「手織職人」が，1838年に急増しているのは，ココロアパン工場の製糸が，外部に前方連関効果をもったためであろう。「その他の繊維関係業」は，ココロアパン工場の労働者を含むのであろう。

職業	親方(maestro)(人)		職人(oficial)(人)		徒弟(aprendice)(人)	
	1825年(a)	1838年(b)	1825年(a)	1838年(b)	1825年(a)	1838年(b)
仕立屋	29	22	120	43	51	46
ししゅう職人	1	1	1	1	0	0
手織職人	18	80	5	80	1	80
その他の繊維関係業	0	276	0	584	0	459
合計	48	379	126	707	52	585

（出所） (a) Vicente Segura, ***Apuntes para la estadística del departamento de Orizaba, formados... en el año 1826*** (Jalapa, 1831), p. 30.
(b) Manuel de Segura, "Apuntes estadísticos del distrito de Orizaba, formados en el año de 1839," ***Boletín de la Sociedad Mexicana de Geografía y Estadística,*** Vol. 4 (1854), p. 32.

（注33） Naredo, *op. cit.*, Vol. 1, pp. 101～105; Manuel de Segura, *op. cit.*, pp. 24～27; Jan Bazant, "Estudio sobre la productividad de la Industria Algodonera Mexicana en 1843-45," *La industria nacional y el Comercio Exterior* (México, D. F., 1962), p. 74; Ezequiel Montes Rodríguez, "La huelga de Río Blanco," (Unpublished thesis, Universidad Nacional Autónoma de México, 1965), p. 17.

（注34） Naredo, *op. cit.*, Vol. 2, pp. 248, 249.

（注35） *La industria nacional y el Comercio Exterior*, apéndice, "Memoria," II (1843), "Estado," Núm. 5; "Memoria," III (1845), "Estado," Núm. 4.

（注36） Arróniz, *op. cit.*, Vol. 2, p. 382, fn.; Francisco R. Calderón, *La República restaurada: La vida económica* (Cosío Villegas, ed., *Historia moderna de México*, 1955), p. 94; さらに，1868年4月13日の首都の *Diario Oficial* 紙は，「ココロアパン工場は，閉鎖されたままである」と報道している。1870年1月13日の *El Siglo XIX* 紙は，「〔ココロアパン〕工場の再開が論じられている」と報道しており，1873年2月23日になると，ベラクルス州の *El Correo de Sotavento* 紙が同工場が，繊維と紙の生産のため，通常600人，最大1000人から1200人の労働者を雇用している，と述べている。

（注37） *Enciclopedia universal ilustrada europeo-americana* (70 vols., Barcelona, 1907-30), Vol. 4, pp. 2, 3; *Diccionario Porrua; historia, biografía, y geografía de México* (México, D. F., 1964), pp. 37, 38; その他，Robert A. Potash, *El Banco de Avío de México* (México, D. F., 1955); Charles A. Hale, "Alamán, Antuñano y la continuidad del liberalismo," *Historia mexicana*, Vol. XI (julio 1961-

junio 1962).

(注38) Manuel de Segura, *op. cit.*, p. 27.

(注39) Agustín Cue Cánovas, *La industria en México* (*1521-1845*) (México, D. F., 1959), p. 59. アラマンは，年率24%もの高利で融資を受けていたが，法令が，年率12%以上の利子率による融資契約を無効としたのちにも，あえて，信義を重んじて，破産したのであった。

(注40) Bazant, *op. cit.*, pp. 72～75. アラマンは，伝統的手工業により蓄積された労働力を豊富にもつプエブラよりも，おもに水力資源の豊かさというオリサバ地方の立地条件に着目した。しかし，首都との運輸に関する不利には，十分気がついていなかった。

(注41) Cue Cánovas, *loc. cit.*; Naredo, *op. cit.*, Vol. 2, pp. 248, 249; Alfonso López Aparício, *Alamán, primer economista de México* (México, D. F., 1956), p. 41; Justo Sierra, *México: su evolución social* (2 vols., México, D. F. and Barcelona, 1901), Vol. 2, p. 141.

(注42) ナレドによれば，グランディソンの手腕が，ココロアパン工場の存続を保証したという。後者は，1887年に死亡した。Naredo, *op. cit.*, Vol. 1, p. 272.

(注43) Calderón, *op. cit.*, pp. 663, 664.

(注44) Luís Chávez Orozco, "La industria de transformación (1821-1910)," *Transformación*, Año 1, No. 6 (dic. 1958), p. 24.

(注45) Thomas U. Brocklehurt, *Mexico Today* (London, 1883), p. 791.

(注46) Miguel A. Quintana, *Estevân de Antuñano* (2 vols., México, D. F., 1957), vol. 2, p. 110; David Pletcher, "The Building of the Mexican Railway." *Hispanic American Historical Review*, XXX (1) (February 1950), p. 35.

(注47) José C. Valadés, *El Porfirismo: historia de un régimen* (3 vols., México, D. F., 1941-48), Vol. 1, p. 341.

(注48) William Henry Bishop, *Old Mexico and Her Lost Provinces* (New York, 1883), p. 200.

(注49) William P. Robertson, *A Visit to Mexico* (2 vols., London, 1853), Vol. 2, p. 390.

(注50) のちに，一蔵相は，エスカンドン兄弟を，私益に奉仕する路線建設のかどで非難した。Mexico, Secretaría de Hacienda y Crédito Público, *Memoria* (1878-79), p. 486. (Pletcher, *op. cit.*, p. 59, fn. 33 に引用さる。)

(注51) Gustavo Baz and E. L. Gallo, *History of the Mexican Railway* (English tr. by George F. Henderson, México, 1876), p. 14; Manuel B. Trens, *Historia de Veracruz* (6 vols., México, D. F. and Jalapa, 1944-50), Vol. 5, Part 1, pp. 311, 312.

(注52) Baz and Gallo, *op. cit.*, pp. 14, 15, 20, 21; John Reginald Southworth, ed., *México ilustrado* (Spanish and English, Liverpool, 1903), pp. 128, 129, 134; Pletcher, *op. cit.*, pp. 42～62.

(注53) 筆者のインタビュー：エスカンドン家の親族。Srta. América Escandón Hernández (1965年4月28日，オリサバ市)。

(注54) Pletcher, *op. cit.*, p. 60; T. Philip Terry, *Terry's Mexico: Handbook for Travellers* (2nd rev. ed., London, Boston, New York and Mexico City, 1911), p. 493.

(注55) Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 1, p. 425.

(注56) 筆者のインタビュー：CIDOSA セリートス (Cerritos) 工場長，Ing. Pedro Reiterhardt (1965年5月，オリサバ市)。

(注57) Montes Rodríguez, *op. cit.*, p. 41; Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 2, p. 1116. 1887年のオリサバ在住の外国人人口の内訳は，スペイン人157人，イギリス人66人，フランス人48人，アメリカ人48人，ドイツ人31人，イタリア人31人，その他12人で，フランス人がとくに大きな権益を所有していたとは考えられない。したがって，首都のフランス移民商人のオリサバ地方の選択は，全く立地条件の考慮のみによるものであろう。人口統計は，Alfonso Luis Velasco, *Geografía y estadística del Estado de Veracruz-Llave* (México, D. F., 1890), p. 174 より。

(注58) George Wythe, *Industry in Latin America* (2nd ed., New York, 1949), p. 283.

(注59) Yamada, *op. cit.*, chs. V–VII.

(注60) CIDOSA の資料; Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 1, p. 454; Auguste Genin, *Les français au Mexique du XVle, siècle à nos jours* (México, D. F., 1924), pp. 430, 431; Sierra, *op. cit.*, Vol. 2, p. 100.

(注61) Anon, *Directorio de Orizaba y su sana-*

torio (Veracruz, Ver., 1908), n. p.

(注62) Francisco Trentini, ed., *El florecimiento de México* (Spanish and English, México, D. F., 1906), p. 230.

(注63) Genin, *op. cit.*, p. 430; Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 2, pp. 1123, 1124.

(注64) *Ibid.*, Vol. 1, pp. 455, 458, 459, 461; Cervecería Moctezuma の記録；なお，ピコジベーも「メキシコに定住したフランス人実業家で」「1895年 San Ildefonso 工場を買収し，大商人の同郷人と提携して，その工場を株式会社とした」。Nicolau d'Olwer, *et. al.*, *op. cit.*, Vol. 2, p. 1117.

(注65) *Ibid.*, Vol. 1, p. 461. 同社の重役は，パリの Benac, Mallet, Turettine, ジュネーブの Chevenière, メキシコの Pinzón, Tron, Pugibet, Hugo Scherer であった。

(注66) José D. Saldaña, *Apuntes históricos sobre la industrialización de Monterrey* (Monterrey, 1965), p. 34.

(注67) Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 1, p. 459.; Genin, *op. cit.*, p. 431.

(注68) 注60に同じ。

(注69) Genin, *op. cit.*, p. 363.

(注70) Pletcher, *op. cit.*, p. 54.

(注71) Genin, *loc. cit.*

(注72) Alfred Tischendorf, *Great Britain and Mexico in the Era of Porfirio Díaz* (Durham, N. C., 1961), p. 112.

(注73) Genin, *loc. cit.*

(注74) Saldaña, *loc. cit.*

(注75) Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 1, p. 455, 458.

(注76) メキシコの独立後，革命までの移民は，数十万程度であったと推定される。1895年からセンサスが行なわれたが，外国人人口は，1895年4万8000人，1900年，5万8000人，1910年11万6527人（うち9％のみ農業従事）である。Moisés González Navarro, *El Porfiriato: la vida social* (Cosío Villegas, ed., *op. cit.*), p. 183. 1910年の全人口は，1520万人であるから，外国人の比率は，きわめて小さい。一方，1821年から1932年までの期間の，新大陸へのヨーロッパ系移民は，次のようであり，アルゼンチン，ブラジルは，メキシコより，1桁多い数の移民を受け入れたことが明らか

移　民　先	移民数(1000人)	比率(%)
アメリカ合衆国	32,244	60
アルゼンチン (1856～1932年)	6,405	11
カナダ	5,206	8.7
ブラジル	4,431	7.4
その他のラテン・アメリカ諸国	5,540	12.9
計	53,826	100.0

(出所) A. M. Carr-Saunders, *World Population* (London, 1936), p. 49.

である。

(注77) Warren Schiff, "The Germans in Mexican Trade and Industry during the Díaz Regime," *The Americas*, XXIII (3) (January 1967), p. 292.

(注78) Trentini, *op. cit.*, p. 230; Genin, *op. cit.*, p. 365; バルスロネットの自然と人文については，Emile Chabrand, *De Barcelonette au Mexique* (Paris, 1892) が引用されている。また，1903年に出版された本にも，次の記事がみられる。「各州内のすべての重要な町には，何人かのフランス人商人がいる。かれらは，バルスロネット人と呼ばれ *ropa*（下着，ラシヤ，流行服など）の商業をほとんど独占してしまっている。かれらは，〔メキシコにおける〕フランス人移民のなかでも，故郷を誇りとする，立派な人間，疲れを知らぬ働き者，有能な商人の一団を形成している。多くのバルスロネット人は，相当の財産を作った。」Charles-H. Stephan, *Le Mexique economique* (Paris: 1903), p. 83.

(注79) Genin, *loc. cit.*

(注80) Trentini, *loc. cit.*

(注81) Schiff, *op. cit.*, pp. 280, 281.

(注82) *Ibid.*, p. 286.

(注83) *Ibid.*, p. 285. シッフは，*Norddeutsche Allgemeine Zeitung* の1884年5月16日を引用している。

(注84) 筆者のインタビュー：Irg. Reiterhardt (1965年5月，オリサバ市)。

(注85) Trentini, *loc. cit.*; なお，19世紀末のメキシコ在住のフランス人とドイツ人の人口は，次のようで，大差はないことがわかる。

	1875年	1895年	1900年	1910年
フランス人 (a)	—	—	3,976	4,500
ドイツ人 (b)	500～600	2,337	2,567	3,645

(a) Trentini, *op. cit.*, p. 232.
(b) Schiff, *op. cit.*, p. 292.

(注86) Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 2, p. 1116.

（注87） A. M. Romero and George F. Zealand, "The Textile Industry," Lloyd J. Hughlett, ed., *Industrialization of Latin America* (New York and London, 1946), p. 422. なお，シッフは，「1880年代末に，フランス人の〔木綿〕工場主たちは，首都の取引先を，ドイツ人から，バルスロネット人へと切り替えた」と述べている。Schiff, *op. cit.*, p. 284. 1880年代初頭のバルスロネット商人の主流による投機的買占めからしめ出された卸売り商が，オリサバ地方以外の地域で工場買収を行なった可能性はあろう。

（注88） Nicolau d'Olwer, *et al.*, *op. cit.*, Vol. 2, p. 1123.

（注89） *Ibid.*, Vol. 2, p. 1118.

（注90） 1910年のメキシコにおけるフランス系の商業資産は，2億フランであったが，フランス本国からメキシコにおける商業を含む各種部門に対して行なわれた投資の総額は5000万フランであった。その時期別内訳は，

1867～79年	10,000,000フラン
1880～98年	30,000,000 〃
1899～1911年	10,000,000 〃

Ibid., Vol. 2, pp. 1123, 1124.

（注91） *Ibid.*, Vol. 1, p. 456.

（注92） *Ibid.*, Vol. 1, p. 454.

（注93） *Ibid.*, Vol. 1, p. 461.

（注94） Galarza, *op. cit.*, p. 185.

Ⅲ 結　論

メキシコにおいて，19世紀末から今世紀初頭にかけての一般的な工業化の機会，とくに本綿製品の国産化による輸入代替の機会をとらえたのは，CIDOSAに代表されるバルスロネット移民商人出身の新しい企業者のグループであった。

オリサバ地方の潜在的立地条件に着目したアラマンと，その立地条件を開発するための鉄道建設に努力したエスカンドン兄弟の両者とも，ココロアパン工場の建設と維持に成功するにとどまった。とくに後者は巨大な資本を所有しながら，19世紀末の経済機会の到来を見送ったのである。両者はヨーロッパ滞在の経験，それによる「社会的逸脱」の可能性，外国資本導入の能力をもち，当時の土着的企業者の典型とはいえなかったが，その実際の企業活動においては，伝統的な投資様式（前者の鉱業，後者の高利貸業と不動産）にあまりに拘束されており，政商的活動にエネルギーの大部分を費したようである。

CIDOSAに代表されるバルスロネット移民企業者は，アラマンとエスカンドン兄弟の業績から生まれた外部経済の利用，株式会社制度の活用，生産から販売までの産業の垂直統合的独占の完成，繊維業以外の国内市場向け消費財工業と生産財工業（鉄鋼）への投資などの諸点において，木綿工業の発展のみならず，全般的な工業化の過程において，アラマンやエスカンドン兄弟とは異なった水準の企業者精神を示した。

政商的活動に関しては，フランス移民企業者たちは，一般に，消極的であったように思われる。実際に，フランス系企業のみが政府の保護を受けたという事実はないようである。しかし，この点について，1893年に蔵相に就任したリマントゥール (José Yves Limantour) がフランス移民の子であったことから，かれとフランス系企業者の関係を調べる必要が残されている。

次に，序章の第1節で想定した，移民の成功についての一般的な諸要因にならって，CIDOSAの事例を再検討しよう。

第1に，バルスロネット移民の場合，元来かれらがもっていたと思われる文化的諸要因のうち，正直，勤勉，質素などの生活態度は，かれらの初期の小売商としての成功を助けた。しかし，南フランスの山間の寒村出身のかれらが，商業と工業とを問わず，近代的企業活動の経験や知識をもっていたとは考えられない。

第2に，メキシコにおいて，かれらの置かれた経済的状況が，かれらの商工業における企業者活動を助けたことは事実であるが，すべてではない。とくに，19世紀メキシコの植民地的経済構造は，直接的には，かれらの成功とほとんど無関係である。これは，以下の理由からいえよう。

⑴ 洋品，繊維製品の小売商としてスタートしたかれらの成功は，独立前後のメキシコの商業構造とは無関係である。植民地時代から，一般の小売商の分野では，つねにメキシコ人が多数を占めていたし，バルスロネット人は蓄財のためにメキシコにきたのであり，ほとんど資本を携行してこなかったと思われるからである。ただ，フランス人のイメージは，かれらに有利だったかもしれない。

⑵ 繊維製品の輸入，卸売業へのかれらの進出も，また，当時のメキシコの貿易構造と直接には無関係である。確かに1880年代までのメキシコの貿易相手地域の分布は，ヨーロッパ諸国60%，アメリカ合衆国30%であった(注95)。このため，イギリス人やドイツ人の輸入業者が勢力をふるったが，ヨーロッパ諸国のなかで，フランスが，とくに大きなシェアーをしめたこともなく，1867年から80年までの期間には，メキシコ，フランス両国間の国交断絶があったのである。バルスロネット商人は，19世紀中葉に，小売商として，かなりの資本を蓄積できたはずであるが，かれらが，ドイツ人卸売商に対する従属から脱却できたのは1880年ごろであった。しかも，当時から，ペソ貨の交換率低下と国際収支の悪化が始まっており，かれらが本国との関係を利用して，輸入，卸売業者として，成功することはできなかった。かれらの製造工業への進出が，この状況の打開策であった。

⑶ 小売から卸売に至る商業活動におけるかれらの成功は，本国からの投資の帰結ではなく，むしろ，後者の原因であった。

⑷ 繊維製品商業における経験，知識，資本の蓄積が，かれらの木綿工業における成功を約束したことは確実であり，このかぎりでは，オーブリーの見解は妥当する。しかし，かれらの商業活動と関連をもたない製鉄などの工業部門については妥当しない。

⑸ CIDOSAの創設，発展にとって，フランス本国からの投資は決定的な要因ではなかった。繊維を含む製造工業における「フランス資本」の優越も，移民の企業者活動の反映でありこそすれ，その原因ではない。

以上の分析から，CIDOSAに代表されるバルスロネット移民の成功に，文化的諸要因の影響が大きかったことが，消極的にではあるが結論される。

問題の企業者の自伝，伝記，社史などが入手できなかったため，文化的諸要因に関して，積極的な証左がきわめて限られていることは確かである。しかし，すでに紹介した諸事実から，少なくとも，次の判断は可能であろう。

かれらの商業における成功が，呼びよせ，のれん分けに似た独立の方法などの相互扶助によるところが多く，工業において多様な企業者活動をする際にも，ある特定，少数の同郷人と提携する傾向が強いことから，かれらが移住という行為によって，「社会的逸脱者」の立場におかれたことが知られる。

バルスロネット人のメキシコ移住の形態が，初期には，出稼ぎ，後期には，呼びよせであることから，かれらが，経済的地位の向上という意識された動機をもっていたことは明らかである。この動機は，かれらの移住前の文化的諸要因や，移住自体から生まれた「社会的逸脱」と結合して，「よ

り質素な生活で満足する」態度を生んだものと思われる。トロンは,「金持に見られること」を恐れて,実業家というよりは,労働者に近い風変りな服装を一生続けたといわれている。バルスロネット移民の初期の生活態度は,自己および外部からのイメージを固定させ,いわゆる“morality tale”を生み,それがふたたびかれらの「社会的逸脱」を維持させ,周囲の社会への同化を妨げたことが考えられる。こうして,かれらは,土着企業者を上回る企業者精神を発揮できたのである。

以上の結論は,革命前メキシコの初期的工業化が,なぜ,移民企業者のイニシアティヴに依存しなければならなかったか,という設問に,ある程度答えるものである。すなわち,革命前メキシコにおいては,伝統的な価値体系,行動様式などの文化的諸要因が,経済発展を妨げていた,ということが示唆されるのである。工業化の初期という社会変動期に,移民企業者が活躍できたのは,かれらが,支配的な価値体系,行動様式の禁止ないし拘束を受けない「社会的逸脱者」でありえたためであろう。

この結論と関連して,メキシコ革命が,伝統的支配階層とかれらによって維持されていた支配的な価値体系を排除することによって,その後の安定した高い経済成長を成就した事実が忘れられてはならない。グレードによれば,メキシコの「革命は,ボス(cacique)家族の繁栄と権力を縮小し,農園の土地を分配したため,国民が独立心と自主性を高め,隷属性を低める方向に進むような,かなりの心理的衝撃を生んだ」(注96)のであり,この結果,「革命は,所得分配の基準が,所属から業績へ,政治と経済の任務分担の基準が,個別的基準から普遍的基準へと変化するのを促進した。最後に,革命運動の民族主義的性格は,………,新しいエリートの社会的役割が,自己志向から集団志向へと変化するのを助けた」(注97)。

革命前メキシコの初期的工業化の過程において移民企業者の役割は大きかったが,その裏面の現象として土着企業者の活動がきわめて限られていたために,製造工業における私的企業者全体の活動は,限られたものになり,鉱業に代表される第1次産品の輸出部門や鉄道などのインフラストラクチァーにおける外国企業の活動が過度に重要になった。革命は,そのような状況に対する反動として生じ,国営企業の役割を大きくせざるをえなかったのである(第16表)。革命後のメキシコの経済発展と企業者精神の問題に関しては,厳密には,本論の課題からはずれるので,今後の研究課題としたい。

第16表 1963年のメキシコにおける企業の形態別構成(資本額による比率)

形　態	上位10企業	上位20企業	上位30企業
国営企業	100.0	88.5	82.2
民族系私企業	0.0	8.7	13.9
外国系私企業	0.0	2.8	3.9

(出所) *The Development of Latin American Private Enterprise* (*A Report by Frank Brandenburg*) (Washington, D. C., 1964), pp. 61～63.

(注95) Francisco R. Calderón, *La República restaurada: La vida económica* (Cosío Villegas, ed., *Historia moderna de México*, México, D. F. and Buenos Aires, 1955), p. 192.

(注96) William P. Glade, Jr., “Revolution and Economic Development,” Glade and Charles W. Anderson, *The Political Economy of Mexico: Two Studies* (Madison, 1963), p. 43.

(注97) *Ibid.*, pp. 50～52.

(調査研究部)